
災害絵図研究試論

18世紀後半から19世紀の日本における災害事例を中心に

An Essay on the Disaster-Pictures from the Late 18th Century to the 19th in Japan

北原糸子

【要旨】ここでは、災害資料全般の見通しを付ける第一歩として、民間の情報活動が活発化する近世中後期以降災害絵図を素材に、史料の分類を試みた。分類は、制作担当者、成果物の閲覧者または利用者、制作目的の三項を基準に行い、A 領主が公的な目的で作らせたもの、B 領主の命令に応じて村役人などが被害の報告を行ったもの、C 個人的必要や興味で記録・絵図にあらわしたもの、D 世の中の不特定多数の人々に向けて売り出すために作られたものの概ね四種類に分類した。

この分類にしたがって、1) 天明3年浅間山噴火(1783)、2) 寛政4年雲仙普賢岳噴火(1792)、3) 弘化4年善光寺地震(1847)、4) 安政大地震(1854, 1855)の5つの大災害の実例を検討した。

上記の例に即して、同一の災害に関するA, B, C, Dそれぞれのカテゴリーに属する絵図類を比較検討することを通して、何のために、何に向かって発せられるかが、情報内容をいかに大きく規定するものかを実態的に認識することができた。特に本論では、従来の災害研究では正確な情報ではないとして評価が低いDに分類されるかわら版類を、近世情報構造のなかに位置づけ、その位相を把握することができたことは意義がある。

はじめに

地震や噴火の自然現象を社会がどう受けとめたかを探る上で、日本歴史上、記録の大衆化が可能になった近世期は、公私両面にわたる豊富な材料をわたしたちに提供してくれる。また、これらの災害は一定の周期性を持つため、現在においてもそうした記録の有用性が防災を目的とする災害科学の面から高く評価され、すでに理学的、工学的な分析・考察の素材として利用され、その成果も提出されている。

しかし、そこで高く価値付けされているものは、災害による地変の正確な記述、正確な描写がなされたもののみである。が、現在残されている文字や絵で現わされた災害資料群はこうしたものに限らない。そして必ずしも地変の発生を正しく伝えるもののみが当時の社会において有意義であったわけでもない。ここでは、ひとまず、近世における災害情報を災害絵図に限って、歴史学の立場から分析を試みておく必要があると考えた。

さて、以下に示す災害絵図のカテゴリは、あくまでも暫定的なものであって、災害資料群分類の第一歩にすぎない。

では、いままぜ絵図に限定するのか。ここで、災害情報全般を扱う余裕がないこと、災害資料全般の分類は、その膨大さからして当面困難であること、言語表現ではカバーできない領域で、災害絵図が多く残されていること、災害情報の伝播を追う点では絵図は比較的簡単に差異を識別できる